

# 『藤乃蔭雅俗庸文自筆』翻刻と解説

蒲生倫子

『藤乃蔭雅俗庸文自筆』は、江戸時代の後期に出雲の御師を務めた加藤信成が、文政五年から十一年（一八二二〜二八）頃にかけて書いた戯れ文の控えである。現在、出雲市立大社図書館に残るこの作品を翻刻し、信成とその時代の出雲について考察する。

翻刻にあたり、本文に句読点・濁点等を補い、各文の頭には番号を新たに付した。

## 【翻刻】

藤乃蔭雅俗庸文自筆

屠蘇酒迹眼前乃霞乎志理弓、餅婆良迺留曾止波  
億母比奈賀楽毛、新玉能歳乃始耳筆登隣低祐許呂  
見夢古止駄爾毛迺士賀丹吉判、石木南羅坐留身迹  
波句知男仕奇己得止応勿肥心乃礮用夫加宜利鳴言  
阿皚志弓舸鬼追頭喇他例婆、難波津乃都豆計坐摩  
望和記万返藏類越、阿師加流遍支賦指步司巴美累  
免可類人綿都海乃祖居豫庫巨与止鳴師沛稻滿秘天  
餘、安積香山能顯見邪屢身能山迺酒井乃水毛弓屠

俱連瑠味酒呼、飲成替波地可空庭那浪必乃幡児売  
能波思鷲記爾南鷓、哥志居。

德里乃爛主正四時鐘權寝酒不二腹乃安所寝藤乃蔭  
飲成

文政五年、壬午春、正月申ノ一日

《一》杉形庵一止許より、春のはじめに酒に榮螺を五  
つそへておくりたる、その札につかはしたりけ  
る消息

新玉の春の始はいづこもくめでたくおはしまし  
て、いよく御年をかさねたまひしとの御こと葉  
は、おさだまりのことながら、春雨のふるきをたづ  
ねて、木のめのあたらしきをするとかやいへば、や  
はりめでたくこそ有けれ。ひきつゞきて、世の人も  
しりくめ繩のはしかくまで山草ゆづる葉のいろよ  
くかはらぬ松の門にぎはしう、ゆきゝの人たえず  
さかえに酒屋かしたまふならめ。おのれも又一つ  
年をいたゞきてよるこびしが、いさゝか足引のや  
まひのいたつきになやみて、ふる年からゆきをお

もみ、みぎはの竹のふしもかゞまりて、おきもやらざりしに、やゝのどかなる春の日の光りとけそめて、日々に心よくなり侍りぬ。されば、御とはせとして、名にしおふ波花の浦も今は春べとさけや此酒を心見てよとおくりたまひしは、梅が香のむかしにかはらぬ御心ばえこそたのもしけれ。また、鬼のこぶしにや似たるらん、さゞぬを五つまでそへてたまはりしは、出雲の浦のいつもくちからづよくあれかしとのほきごとならん。是なんうま酒や、三輪の神の御心なるべし。そも、君が家の名の杉のしるしも見えて盃をとりをさめんことこそ、めでたけれ。口にも心にもよるこびはやまざるの年の始の御礼は、遠からざる内に此大こくがまい出てこそ、あなかしこ。

不二腹飲成

むつきのはじめの七日

杉形庵一止君へ

追つきていふ。波花てふ酒をころみしに、和爛良酔とやらいふ書に碧玉寒蘆錐脱囊となんありけるをおもひよりて、

浪花てふ 酒の風味は ふくろから

つらぬく蘆の よにもめづらし

また、榮螺を、

さゞぬ五つ ころくくくと いつまでも

いづもの浦に よるこびぞする

〓〓 錆刀の銘

おのが家に年久しく持つたへたる二ふりの刀ありけるが、錆つきて銘もあるやなしやしらず。松府の松原氏をたのみて磨師にきよめさせたるに、小のぶんは備前の古刀にて匂ひ美々しく、大の分も中昔のものと見えて、二振とも備前なるべしといへり。されば、ながく家にとゞめて重宝せよとて、松原氏ねもころにふみかきそへておくりかへしたるに、

磨あげし 君が心の 直焼刀

さやにをさめよ 守る此太刀

となん有ける返しに、よみてつかはしけるおのが哥は、

幾年か 横ほりふせし さび刀

さやに見だすは 君が真心

をりしも、五月雨の頃なりければ、

磨あげて ふたゝびわれに さづきなら

あめのめぐみの 二ふりの太刀

世に千里の馬あれども伯樂なしと古人の言葉、うべなるかな。昔、備前長光といへる名作すら、世の塵にうづもれ古物棚にさびつきてありしを、田家の男買とりて鎌に打かへんとて、牛につけたる小豆俵のはしにさしこみてかへりける道にて、一人の侍あとよりゆくに、小豆の二ツにわかれたるが俵よりほろくとおちけるを見つけ、きつと心を

とめて俵の小口を見れば、錆たる刀をさしこみたり。わざものならんと其男に近よりてさまぐにすかし、わづかの錢をとらせて乞もとめ、家にかへりて磨きよめさせたるに、天晴ふしぎの名作にて、銘は長光とあれば、是より小豆長光と名づけて重宝せしかや。今、我家の錆刀をそれにたくらぶべきにはあらねど、幾年月か横ほりふして、さやの中山なかくに甲斐がねのときにふきをしらずでうづみおきたるに、月の光をあらはしてふたゝび箱根にをさめて家の守にせよとありしを、うれしみおもふまに、かの小豆長光の昔語までをこがましくも愛にかきしるして、おのが一言をそへたるも、そへざしの小づかのつがもなく、つばらかならで、ふちにもあらぬあさき心をはゞきもとにはき出したるぞ、人のめぬきかけんにはあらず、たゞねざめの枕もとにこじりつけて、しとゞめたるになん。

長光も しばし小豆の さび刀

すりみがきたる 備前すり鉢

《三》二種日記を見て、吉田の久義の許へかへすとて、かきておくりたる文

末通女子や若狭の国うまし小濱の石田のあるじ千頼といふ人の許より、八束穂の吉田の久義ぬしに、国のつとにとて一卷をかつけられたるを、とりかへりて、おのれにも見よやとて、愛にもてきませる

をひらき見たりしに、あや椿のあやにくすしき神の御社に詣て、香取の海のそこゐふかき神の御めぐみをかゞふりて国にかへられし人たちの日記になもありける。そもく、橘ノ千蔭ぬしのむかしをしのぶ心ばへは、かしこしや。鹿嶋の神び磯松がえに日蔭のかづらかけてたのもしくぞおもほえける。平春海ぬしのうらゝかなる言葉の花を手折て見れば、賤のをわれもいかで心のつかざらめや。村田の並桜ぬしがみちしるべして、そこかしこにてよみ出たる哥どもをみれば、たびごとにゆかしさそはる。葦草のつまですぎぬる人やはある。されば、おのもく師木嶋の山跡ことの葉の筆すさみのしなたかくて、文のみやびたるそちをおむがしみおもふにつけても、木曾路なるさのゝ船橋ふみみんたびのたよにもなりなむものぞよ。いづみ野の原いつみしこともなかりしを、とね川の岸によるなみしばくもその人々にたいめせしこゝちなむしける。今は、吉田のあるじにかへしてんとて、花もにははぬ深山木のつたなきおのが言の葉をつゞりておくりたるは、見る人々の心のした草をひきむすびてわらひたまふらん、かしこ。

《四》吉口久吞がつくりたる、宇賀の妹背草てふ書の序文をかきてよたのまれ

瀬のたはれぶみは、いもが心をほりいだす鋏のゑにしとぞなれりける。涎くるかた糸のよるとなく、

唇のひるとなく、酒のくどくにかんじて心をうごかし、いろめをみするは、此みちのたづきなりける。爰に、おのが酒の腹から辛酒のあそび吉口の久呑となんいふ人あり。いにし年の水無月頃、宇賀の郷といふ処になにごとかものしたりけん、それとはさだかにきゝしらねど、佐田尾何某許やどりし夜のあけがたに、出雲川の辺に出てこなたよりわたらんとせしに、おもほえずうまし少女のあとよりよばひて、おのれもともにたのめければ、夢のうき橋うながけて、玉手さしわたしやられしが、なにくれとかたらひたることもなく、しら雲のあなたこなたに立わかれたるは、酒のかんがへもなき此道のたえまならめ。いまは心すめんとおもはれしかども、さすかたもなければ、おさへんとする槽權もなくひかへたるは、追風に船のほるなきこゝちになんありつらん。扱は、せんかたなみにうかれて、夕立のふるさとなる岩屋の駅にたどりつきてやどりしは、あさましよう、あくるあさまで蚤にせゝられ、いねがてなるまゝにかき出されし寝まきの一まきを、宇賀の妹背草と名をおびて、是にはしがきせよとこはれしかども、おのがみじかきかたひもとをとりむすばんことかはと、いなみのゝいなみしかども、かさねていひおこせたるに、雨ならなくてかぶりもなりがたく、足ずりしたる硯の墨にかきくろめんと筆をはせたるは、うまみもなき口つきの髭

男、徳利の爛主不二腹飲成

おなじ書の奥に、甘井里餅の君、しり書をしたまひ、飲成に見よとて哥をよみそへておくられたる

おろかさに 氣をとりのぼせ あたまから  
かきちらしたる ふみのしりがき  
飲成返し

ふみなれし 君はもとより しりがきを  
われはしらねば 恥のはしがき

《五》竹の窓守呑が許よりふみかきておくりたる、あ

くる日の朝につかはしたるかへりごとのふみ  
たまゝ御手づからかきおくりたまはりたる御ふ  
みのおもてのごとく、かれもこれも年果月の八日  
のあれには、吹あげのはまゆかまでもなみゝくに  
たち出がたく、山の神の顔の風雀鯨のはりをもて  
ぬふてふ糸のよりかゝるも、焼餅のつきなきこゝ  
ちなんしける折から、吉口のあろじ、吉備のしりと  
やら箒の国のちりとやら多里とやらへゆくとして、  
いとまつげに門口にくにやりとしたるをとらへた  
れば、こよひばかりいなさの濱のいなにはあらね  
ど長尻はならずといふを、じやゝ馬ながらはな  
むけせんと、有あふ酒をちろりにうつして茶の間  
の茶碗で二ツ三ツ呑かはすうちに、籠へに米の粉  
を手こねんとするはしためは、おくやまずみのみ  
こともちてやきもちをやくならんと、

やき餅は そちで八日<sup>ヤ</sup>まち こちは又  
酒で酔か<sup>く</sup> いとまごひせん

となんよみたれば、吉口もおかしがりつゝ、わがうちにもやくそくのことありと、さゝこの嶋のいそがしがりてかへらんとするを、

はき出さぬ さきにいぬとは めづらしや  
箒にいそぐ 心なるらん

是はく<sup>く</sup>とばかり、はなむけもそこ<sup>く</sup>に、はしり馬の尻かすめてかへりたるあとにへばりつきて居たれど、なんのへもないこゝちぞしける。今日は新酒をもらひ、時刻にならばこゝろみんとおもひ侍りぬ。きはめて水くさからんが、君もわれも古き刀のことゝぎれてはさびしく、さやにみもをさまりがたくおもふは、つねのことなりけり。おなじ心にさりこみたき氣ざしあらば、夕かけて我許にきませよ、かしこ。

年果月の九日

竹の窓君

のみ成

《六》 ある友だちの許へやりたるふみ

このちかきころは、このめる酒も久米の岩ばしたえて遠く<sup>く</sup>しう日<sup>を</sup>すごし侍りぬ。すこし風の御こゝちとやらん、ほどなくおこたりたまひしや。夜べはまかでんとたまはせしに、折こそよけれ、酒もあり、さかなもいさゝかあなれば、君が一言主の神かけて、まてどもく<sup>く</sup>来<sup>ま</sup>まさず、あだし人にたま

はせんも口をしとて、子ころまでおきあつゝ、おのれものまずでふせりぬ。今宵は風もふかぬば、おもひたつたの山ならで、此夜のくらきはいとせなく入らせたまへや。味酒をたまはせんは、かならず又たがひたまひそ。よべまたせたまひしことのがよりし長月のこの夜を、ながき心ながらまたせるも、ながき長袖殿になん有けるは、穴かしこ。

《七》 西村信昌が許より消息をおくり来たるに、世のことのせわしさにまぎれて直に返しもせで、あくる日にやりたりけるふみ

きのふはめづらかなる御消息をおくりたまはりしに、世のことにまぎれてながめまいらすいとまもなく、けふまでもかへりごとをきこえさせずして、むらいにうちすごせしつみはゆるしたまへよ。扱なん、今朝ほど見たてまつりしに、此一日二日は御いたみもやわらぎ御心のむすぶふれもとけたまひ、いとく<sup>く</sup>よろこびおもほす折から、守親ぬし、茶碗と茶筌を急がきたるをもてまうできて、それに讀とやらをせさせたまへよとすゝめられたるにまかせ、すぐによみ出てかきたまひたる御哥の心ばえを、おのれのみよやとて書おくり見せたまはりしを、心とめて口にあぢはひまいらせしに、みやびたる御すがたは天目山の蔭たかく、松風の音のどやかにきゝもおよばぬおのれさへ、茶筌の穂のほのめきたるこゝちぞしける。守臣ぬし、知明ぬ

しには、はやく見せまいらせたまひしとて、その序にて卯月のはじめの哥といふことを沓冠におき、また、かきつばた、ほととぎす、といふ十文字をもおなじさまにくばりおきてよみたまひし哥ども、見れば見るまにく、きけばきく耳のあかまでもさらへたり。されば、おのがみじかき心にもなほやまざるの人まねをして、松の木にはへまたふたるつたなき言の葉をおきならべたるを、そのまゝに君に御らんぜさせんははづかしきことながらも、卯月のはじめの哥といふことを沓冠におきて、

うらみつゝ きなり衣の はしけやし

めでにし花の うつりがのはた

かきつばた、ほととぎす、

かれがなほ きにし日よりと つくるわざと

はじめてふかき 田におりたゝす

扱なん、幾年月考て時はたつとも、おかしみ給ふほどの口ずさみは出でくべきことのあらざれば、たゞ君がたの御口つをまねてよだれをねぶるになん有ける。守臣ぬしは、おのが許にさゝの相手にちよつちよとくる雀子とのみおもひ居たりしに、さゝ竹の大宮人の真似をして、沓よ冠よとむつかしげなることをはき出されたるものかな。君のごとくよむ人は、よみもせよ。おさなきわれらが心には、しやくをおこすわざになん有ける。かの雀の子ぞ心にくゝ、舌をきりてやらまほしうこそ、あな

しこくぞ。

卯月はじめの五日

のぶ成

西村大人

《八》おのがあめりし月夜の庫満吾徳てふ書に、みづから書たりし序文

真すぐにしてうるはしきは、三輪のしるしの杉を見よ、酒のむ人の心生也。あけくれ竹の露をおもみて代々にたゆる時なく、草の道のたすけとなりて、なめての人の片腕とぞなれりける。されば、世の塵ひちにくもりたる心のうれひをはらふ玉箒となりて志酒嶋の道ひろくおこなはるゝ中に、昔より下戸てふものありて、其徳利をかんがへしることなく、ひたぶるに是をきらひ、餅団子の類を好もの、又つくともつくることなし。是は、甘氣アマキの筑国ツクニよりおこりて世に喰ひるごり、いつの頃よりか皇神の御前にさへ供ることゝなりて、ともにもちひらるゝものなれば、それはそれはこれと、おのがこのむ處にしたがひてよけんを、やゝもすれば餅鉢の目もあかぬ下戸ども等が練木して上戸をすりつぶさんとほかるぞかし。こは、おふけなきたはわざにぞ有ける。爰に今、不二腹の安所寝飲成主は、古の明徳利を爛がひあきらめて酒善にとどまる所をさとり、又、餅団子は口にうましといへども其性にあく有ことをしめして一まきとし、草津の里にかりねしたまふ有餅君の許におくらんを、是見よと

おのが名さへ又六に吞こまぬことども、奥山にふみわけて紅葉のいろのこきあさきを直に手折て見がごとくものせられしは、しかも猿真似大夫はさておきて酒の性正公の子孫ならで、かゝるあぢはひのいづべくもあらじとかしこみおもふあまりに、吾店さきなる茶碗酒さへわりなくおむがしう、竹筒の口を打あけておのがふしもなき言の葉をのばへ、酒まく浪の谷河に掛わたしたる此はしづみよ、世にかよはせてたえずしあらば、露霜はあらたまるとも松の葉の散うせず、まさ木のかづらながくのみひろごりて、春秋はめぐるとも空ゆく月夜のこまことを見たらん人は盃をさざれ石のいはほとなるよろこびにあひて、千鳥足のこけむすまでいにしへをあふぎて、いまをこひのまざらめかも。

徳理の爛主の教子酒村又六三輪本の杉門

右は、飲成が自序ながら教子の書しさましてあらはせしなりけり。おなじ書に手づから尻がき是の一まきをものせしは、五月雨の頃、やむごとなき御方、草津の駅に年ふりし姥が名をかりて、そのむす子の甘井里餅と名のりたまひて、飲成が好ける酒の桶元池田の親父と名をさして、消息を添て雨夜の久利語と名附たる一まきをおくりたまひしを、くりかへして見たりしに、酒のたはわざをさぐり出してかき餅のかきさかし、あられもなく世にいひふらさせんとおもほしたるなり。いかに

酒をこのまざる人の心にはさおもほすもことわりながら、それをおしかへして飲なほすは酒のみのちからなれども、おのが心のなまじひにかきまはさばへだてがましうおもほさんこともやと、伊丹の里のいたましうさしひかへたるを、酒の徳利のおよぶかぎりは心ざしをあらはせよとありし消息のおもむきにつきて、稲佐の濱の海べたに打かくるあみのめにかゝる魚の名のいなともいひがたくて、さらば酒飲の口あみもゝろもちにしてになひもてきて、あきらかにひきあげたるになんありける。それにつきては、餅団子のなれるはじめまでもみあらはせしを、蕨餅のわらひともならばおかしからんを、下戸の心に練木してつきかへさんとしたまはゞ、又、上戸は管鐘をかまへん。さては、いつかはてしありともおぼえず、とにも重箱餅は風呂敷につまましう、ふたゝび手をつけじとおもひはかりしかども、又々よくかうがへ見るに、そは酒の真心にはあらじ。今、飲成一人が心として酒の名をくたさば、酒殿に座神をはじめ、もろく諸白の神の御とがめも恐しう、又は酒のはらからたちのうらみなきにしもあらじと、彼はやむことを得ずながめ居たりしが、今ではたためく水無月の廿日ばかり、月の出汐に船さすさほのさしてよろしき夜ころにもなれば、盃をうかめて酔のめぐるまゝに月夜の古真語と名をおふせつ一卷とは

なしたるや。是をひらき見ん上戸たちは、古の明徳を天下に明にして、酒善に止る所をしるの門なり。又、下戸どもは、もちづきの名もうすらぎて、山のはにくひ入るこゝちやしなむ。しかありといへども、馬とさして人をあざむくにもあらず。昔より定りたる酒善の道にして、今吾俄につくり出したる一夜酒のにこり口にはあらざるぞよ。能古のあぢはひをのみこんで、かく大口をたゞくものは、酒乃案白太鼓樽の君にしたがひ、皇国はいふもさらなり、高麗唐土の者どもまでに、からきあぢはひをしらせ、なめての人に舌ふるひをさせたる名大酒鬼古呂志とよばれ、又酒の精正功と神にいつきまつられたる人の孫、徳理の爛主正四時ノ鐘權寝酒不二腹ノ安所寝藤乃蔭ノ延成、亦ノ名は、飲成。

文政六年癸未、夏六月末の二日

《九》越前国角鹿のさとに、輪田丸、半月、本末とて、三人の狂歌師あり。それらが許に、おのが年頃よみ出したる一卷を見せにつかはすにつけて序を加へたる、其文

これの一とじは、おのが藤の蔭にしてふみ見るあまり筆取るついでに庭の落葉をはきよせ置たるがごとき物なれば、まなびの親もなければはらからもなし。難波津のつゞけさまもしらねば、安積香山の蔭だにも見ず、賤しきわらはへの砂書のごとくかきさかしたるを、酒のみかはす友だちに吉口の

翁のいふ、越の国には此道の聖たちあまたおはせば、其人々に見せまいらせてよしやあしのわかちもしれかしとすゝめられければ、白山のゆき見るべくもあらざるおのれはしも、朝日にむかふこゝちして、沫雪のとけかゝるがごとくおもひおこして、吾恥のはしがきども、ならばなれ、水にすむ蛙も哥をよむときけば、草葉にすだく秋の虫も又おなじからずやと、心のぶときは盲へびにおそれざるのとへならんかし。さらばなん、その口にくはへられんこともありなんとおもふのみなり、穴かしこ。

《十》陸奥国志田郡新沼村の人大田口伝記といふ人、吾藤の蔭にきよりしばし杖をとどめたりし折から、伊与国松山人野上汐仲子、泊りあはせてねもごろに物語などするにつけ、筆をとりて

奥豫雲三国のまじはり、東西南などして三角なりといへど、日の本の山の山跡の倭心ぞ、みなまるめておなじかりける。されば、此藤の蔭にきたりし人々の面をあはせ見るに、四角にもあらず、きのふもけふも円居してかたりあふ真心のあきらかなる世に光りは見えずとも胸中の夜光の玉とやいはんとほめそやし、おのが一口にまるめてのみこみ顔にはき出したるを、藤かつらのわがまゝにまきつけたるよとわらはん人もあらん、かしこ。

唐錦 それよりぞまた 円居して



たゞまくをしき 藤なみの蔭

月見笠の記

久堅のあめにしてはお月さまよりはじまり、あらかねのつちにしては草をゆひつかねきて、出雲国の簸の河上にくだりましたる大神よりぞおこりける。人の代となりてはかの菅草をぬひたらはしたるを、難波の浦におふよしやあしの皮もてつくれるあり。雪の中の筍をほり出したる人や、その皮もてぬふたるをいたゞきたるもあり。世すて人は檜もてものせしをかぶりありくなど、そのしなあげていふべくもあらざるを、千早振神代もしらぬしら紙をひねりてつくりたるこより笠を月見笠と名づけたるは、よりどころありてなるべし。爰に遠きみちのくより大田口のぬし八雲立出雲の大宮をおろがまむとて我藤の蔭にきたりしばし杖をとゞめられしが、立わかれなんとす時に、おなじやどりにして伊与の国松山人野上何某にかづけ、これを着て陸奥国にこよ、かたみに名のりあはんとちぎられしが、小夜の中山中く、に六十の霜をいたゞきてはおぼつかなくやおもはれけん、いのちなりけりといひつゝ我床の辺の程に掛おきて此笠のあろじにたいめすこゝちにてながめふるせよとありけるにぞ、笠取山の取あへずもおのが一言をひきさき紙にひねり出しかいつけたるも、やれ笠の緒の長くしうをこがましきわざにやあらん、かし

こ。

出雲浦人藤の蔭のぶ成

目にも見つ 手にも取り 月見笠

まためぐりあふ ひもあらんやと

野上氏にかはりてよめるは、

みちのくに 我こよりより 君が爰に

かさねてきます するしとや見ん

《十一》 藤間昌春、おのが藤の蔭によりて狂名をつけてよとたのまれけるにぞ、その名をおふせた

るさまの文をかきてつかはしける、其文

藤の間戸の昌春ぬしは、山跡歌にこゝろざし深く、おのづから出雲の浦の汐のみちひろごるがごとく、近きころは飲成が好めるざれ哥をもしたひ来ておなじ薙にのべつらねたまひしを見まいらせたるに、いともよりどころありて、おかしうおもしろかりける。かゝれば、此道によれる名をおふせてよとありけるにつけて、おもへばもとは酒のはらからなりしかども、さはることのありてふつにしばし止られたれば、今は餅腹のつきなきがごとく、おのれしもやゝ思ひつかざりしが、酒気師満の道はわすれがたしとて、けふは人みななのなみくにかたむけたまふ盃はさざれ石のいはほとなるまでのよろこびになんある。さらば、もとのやまとの真心に立かへりて酒気腹乃飲春とよばまほしうあなれば、入れひものおなじ心にむすばんこと、おのれはい

ふもさらなり、此道の友だちくもともによるこばえて、いやさかえにさかえなんものぞよ。今は文政の十とせあまり一年といふ年の春、弥生の中半頃ものにかきつけておくることの、あなかしこ。

《十二》吉口の久飲の許へおくりたるふみ

ちかきころは、桜木のはなならなくにちらりほらりと見かはしつゝ、春の日ののどやかなるにも似ずいとくさわがしうおもひすごしゝに、きのふは雀子がなよ竹のふしどによりてさゝの相手となりて、盃のさらくゝにさらだめておもしろう、ざれ哥などよみかはし、竹筒のそこをうちぬきたる嘶のくさくゝひきむすびて、思ひのほかにおかしかりしを、君が奥山住の家務さま腹やまずみのいたましめたまふとて、いまだ盃の入がてなるに立かへりたまへば、あとさびしう物あはれにおもひよりて、夜道もいかにやいかにとおのが寢床に横ばへながらおもひつゞけたりしが、けふは御心よくだいたみもすこしはおこたせたまひしと人づてにはきゝしが、まことなるやいかにとはせのしるしに素麵を三わけおくりまゐらすも、三輪の里の古事くさくはあろけれど、いとくゝいさゝかなる心ばせのしるしになん、かしこ。

《十三》磯の美留女といふたはれぶみを吉口の久飲が

つくりて加筆をばたのみけるによりて、文をも哥をもよみ直しつゞり直して、またそれが

はしぶみもす。その序文、左に記

色酒間の道は、天地のはじまりける時よりいできにけり。故、二柱の神、天の酒矛をさしくだして女腹をかきさぐりたまひしより穴にやしえをとめをどりのたまひしぞ、此道のはじめなりける。されば、日の本のもとの大倭より伝はりて、潮の沫のこりてなりにしもろくゝのから国までも生としいけるもの、いづれかこれをいそしまざらん。竹になく雀もさゝの相手となりてちよんちよときてとまるからしなよくいろの道をさとり、溝に強る蛭も酒桶の洗汁をすゝり赤子をうんで金魚銀魚の助となりぬ。金魚又玉子をふりつけてめだつにしたがひ、鶴鶉にはならねどもおのずから尻がしらをうごかしているこのうつくしくなるまゝに人の目をよろこばしむ。扱みなしかり。されば、天の下におひしげれる草人草のことわざしげき世の中にも、酒は色の下につかんことよはく色は酒の上にたゝんことうすくなん有ける。爰に、師木嶋の山跡にして、加良酒の安所寝吉口の久飲と酒気軒在腹の飲平とは、其すめる家は南北とへだゝれども、雁のゆきかひたゆる時なく、縄になれかづらになれといふばかりにむつまじきは、かの二ツの道をなひませたるゆゑなり。さるを、今年文政の十あまり一とせといふ年、昔をしぬぶ橘月といふ九日の日の朝、酒気軒のあるじより蚤の佐具女に消息を持せ、今日な

ん御崎の方にまかでんとおもふなりといひやられ  
たれば、吉口のあるじたちに出たちて稲佐の濱ま  
でいざなひつれて小舟をよそひさせ乗出さんとす  
時に、見るめあやしき少女の起きたりてその舟に  
のせたまへといふ言葉をきくに、昔嘶にいふ糊を  
なめて舌を切られし雀の口もとのごとくして、あ  
ざやかならねどもさゝの相手はよからむとてのせ  
られたるに、小舟のすいたらしき目づかひにめ  
で、恋風のまに／＼ほに出たるたはれごとは筆  
にはえつくされじとぞ思ふ。扱、それより御崎にい  
たりては、内藤何某の許にてあるじしられ、ある夜  
は海辺に出て酒をくまむとしられしに、はからず  
もかの雀少女さやづり出て酌を取るにうつゝをぬ  
かされて、夢てふものはたのみそめてきとよみし  
むかしの小町にはあらざるやと一夜も百夜のおも  
ひをなし、ある日は布の岩屋に入りて穴のいはれ  
をたづね、桑原の家にとめられし夜は雷の袋持か  
とみるめあらめの鬼婆めにおどされ臍をかくすの  
おもひをなしゝも、此家の名をとなへつゝよまれ  
たる哥の徳によりて鳴おとをしづめ、ある時は飲  
平の母戸自がめしつれられたる手強女が韓国へ流  
されんとしたるをも 息長帯比売命の古事までも  
夏引の手びきの糸のひきことをもて哥によみ文に  
もあらはされたるはらからたちの筆づさみのしな  
高く不二のねのねもころにいとぎゝぬときひ

るげて見どころおほくぞありける。いやはての日  
は、波たてめぐる鳴々や磯ゆく嶋のはし／＼まで  
ものこる處なく見めぐりはてゝ、八百丹杵築の海  
べたにこぎもどす舟の中にて鼻紙のかみあまりも  
て一まきにして磯の美留女とのべ紙はこたびの家  
づとなればおのれに見よとて久飲ぬしが懐にして  
もてきましたるを、五月雨のころ、ふるき軒端に糸  
水のくり返しながめ入しに、御崎めのあぢはひに  
口あぢみしつ舌つゞみをうちて、よろこばれしも  
うべなりけり。さらば、おのれにしはしかしかめよ、  
はしがきをだにするめと手のさらにすゑてよく見  
れば、鮎のあしのこは／＼ながら、取つかんすべも  
なく、ほそ谷河の岸にはあらで、御崎のはなに丸木  
のはしづみを掛わたさんものかはとおもふにつけ  
て、又よくおもへば、生海鼠の口さへさかれて、細  
刀のひもながき末の世までもいろごのみの家のた  
すけとなり、潮の味のから人までもめでたがるも  
のをと宇受女の神の仕わざをおかしみ、猿田比古  
の神の鼻ならぬ御崎ばなに掛わたしたる此はしづ  
みを、大浦ばなより見たしてわらふ人もあらん  
か。なれどみるめかる人々よ、かならずおのがはな  
にかけたりとなおもひたまひそ。此あらめなるは  
しづみこそ、布の岩屋の穴かしこ。

徳利爛主不二腹飲成

《十四》藤間何某の許に造る老松といふ酒を吉田久義

に恵みたるに、久義いたく酔にふして前後を  
しらず有しを助けて吉田が許におくられしと  
なん。のちに藤間氏に文書てやらんを、信成に  
文作をたのみけるにぞ、書てつかはず文

酒は世のくせものとして、好人のくせはさまぐ、あ  
なれど、そのくせを悪んでその人を悪まずとは、君  
子の詞うべなるかな。酔にしろてむらいなるわざ  
多く、醒て面なきことはわれも人もさまぐなる  
中に、さきところは君が御恵のりもよし田が好  
事なれば、老松の千年にあへよとの御言葉をうれ  
しみおもふが上に、銘は名高き松下の常磐の前に  
さしそへば、奥深き千恵女とてなまめき立る女郎  
花のかしかましからぬさまは色里なれていろ里な  
らざる風情ありて、えもいはぬながめに見とれの  
むほどにたまふほどに手の舞足のふみ所をしらず、  
のちにはいかにありしや、夢ともうつゝともわき  
がたかりしを、かしこくも君が厚き情に助けられ  
て御許までかへりしとなん。されど、なほ酔さめず、  
いやましにたはわざ多くたはごとのみのゝしりし  
を、とがめもしたまはで、人しておのが草のやれ戸  
にひきたてゝおくりつけさせてたまはりしとなん  
きく。夜あけて、おのが心にとひ、あきらめんとす  
れど、なほあやめもわかぬ五月闇にひとしければ、  
人にたづねてきゝ侍りしに、おのれながら、あやし  
くこそありけれ。此年月酒の座につらなりては久

呑とよばれたるおのれなれどかくまでの恥はかゝ  
ざりしを、めづらしう、君がめぐみをかゞふりて、  
めづらしき酔にうつゝをぬかしゝは、なんとこと  
わけていはんすべなく、舌をまきて眼をひらくこ  
とあたはず。しかはあれど、好事のくせものおほし、  
あきらめたまはりて、むらいなることは幾重にも  
ゆるしたまひてよ。かくいふも、なほくだくしき  
長くだよとおぼされんかも、穴かしこ。

老松の 千年の蔭に 酒をくみて  
足たゝぬまで 酔にけるかな

\* \* \*

加藤信成は千家俊信に学んだ。信成の御師としての  
活動は文化二年（一八〇五）から始まり、伊予国を中心  
に出雲大神の神徳を説いて廻った。布教の旅の中、信成  
は広く人々に受け入れられる戯れ歌を良く詠み、披露  
した。時には滑稽な歌で場を盛り上げ、また別の機会に  
は古学をはじめとする知識をもって会話を楽しみ、状  
況や相手によつて巧みに使い分ける事で、土地の人々  
と心を通わせて行く。滑稽と酒を好んだ彼は、不二腹飲  
成と名乗った。

戯れ歌は信成の旅を助け、布教の手段としても大い  
に役立った。廻国先には、彼の歌を心待ちにする者も少  
なくなかった。また、郷里出雲においては「酒のはらか  
ら」と呼ぶ仲間の中心にあつたが、これは単なる酒友に  
とどまらない、酒に因む狂名をつけた狂歌師のグルー

ブであった。

『藤乃蔭雅俗庸文自筆』は、この「酒のはらから」たちへの書簡を主とした、十四の自作の戯れ文の控えである。各文をまとめると、次のようになる。

《一》 文政五年頃、杉形庵一止宛手紙。初春の挨拶、酒と栄螺を受け取った礼。

《二》 伝家の刀を松江の松原氏を通じて磨に出す。

刀につけて松原氏とやり取りした歌について、筆の顛末を記した戯れ文に合わせて控える。

《三》 吉田久芳（久義）宛手紙。久義が若狭から持ち帰った『二種日記』を借り受け、返却する際につけた。

《四》 吉口久吞（吉田久義の狂名）『宇賀の妹背草』序文。また、跋文を記した甘井里餅とやり取りをした歌も合わせて控える。

《五》 竹の窓守吞宛手紙。吉田久義の旅立ちにつけて、語らいに誘う戯れ文。

《六》 某人宛手紙。来訪の無かった某人に対し、改めて酒の相手に誘う戯れ文。

《七》 西村信昌宛手紙。茶碗と茶筌の画に讀をした人々のエピソードを語る。

《八》 文政六年、飲成（信成の狂名）『月夜の庫満吾徳』序文。架空の弟子・酒村又六の体で序文を記し、不二腹飲成としての跋文も記した。

《九》 越前国角鹿の狂歌師宛手紙。吉田久義の紹介

により、三人の狂歌師に自らの作品を送る。

《十》 信成の家に滞在した、陸奥国人・大口口伝記と伊与国人・野上汐仲子との交流の記録。

《十一》 文政十一年、藤間昌春宛手紙。狂名をつけて欲しいと頼まれ「酒気腹飲春」の名をおくる。

《十二》 吉田久義宛手紙。素麺をおくるのにつけ、様子をおくがう。

《十三》 文政十一年、吉口久飲『磯の美留女』序文。

作品と歌に加筆修正も施したと有。

《十四》 吉田久義の為、手紙の代作。酒席での粗相を詫びる内容を、戯れ文で表現。

信成は出雲においても狂歌や戯れ文の創作活動を良く行なった。出雲での彼の活動は、「酒のはらから」たちと共にある。「酒」に因んだ狂名を付け、作品を披露し合った仲間である。彼らに関する記述は《四》《五》《九》《十一》《十二》《十三》《十四》に見られる。ここに「吉口久吞（吉田久義）」「酒気腹飲春（藤間昌春）」「竹の窓守吞（中村守臣カ）」「在腹飲平」といった名が見える。

この頃の出雲では、伝統的で雅やかな歌風が主流であった。戯れ歌は、主に信成が中心になって活動を展開していた。この集団において信成は歌や文を交わす一人の仲間というより、活動の中心に居る指導者であった。吉田久義らも旅を題材にした戯れ文などを作ったが、信成による助言や手直しを期待したもので、自由に

作品を交わすといったものでは無かった。《九》で信成は自らの状況について「まなびの親もなければ、はらからもなし」と述べている事から、集団における彼の指導者としての役割は非常に大きかった事がうかがえる。

また《八》では自分の作品に弟子の体をして序文を書いているから、信成の周囲の人物では、彼の修正無くして序文を任せる事が難しかったとも言える。

信成は狂歌による交流を他国に求める。甘井里餅は、信成が一歌人として自由に歌や作品を交わせる良い相手であった。彼らは「餅好きと酒好き」「下戸と上戸」という対立の体で、戯れ文や歌の交換を楽しんだ。酒の戯業を書いたという甘井里餅の作品『雨夜の久利語』に、信成は酒の徳を述べた『月夜の古真語』で応じるが、いずれも本居宣長『神代真語』を意識した書名となっている。

信成と彼を取り巻く歌人たちからは、本居宣長へと向かう繋がりが見える。文政二年（二八一九）に信成が著した『宇和鯛家津登日記』には、本居大平から教えを受け「古事まなびに心ざしふか」い土地の庄屋と熱心に語り合ったと記録されている。「酒のはらから」吉田久義は若狭国から『二種日記』を持ち帰り、信成ら出雲の歌人たちにも見せているが、これは石田千穎から土産として譲り受けたものであった。出雲国内外で他国の者と交流し、活動を展開しようとする時、彼らを支えたもののひとつに、千家俊信を通しての本居宣長・大平へ

と繋がる強い人脈があった。出雲の文人たちにとってこの繋がりには、大変心強く感じられたに違いない。

（出雲中央図書館司書）